

# テアとチューネンをめぐる古典研究の伝統と挑戦

相川 哲夫

## 1. 古典研究の現況

### 1) ドイツ再統一後のテアとチューネン

このところ、わが国では農業経済学に関係する古典の公刊が続き古典の当たり年になっている。2007年にはA.スミス(1723~1790年)の『国富論』の新訳を皮切りに、2007~2008年の農学界ではJ.v.リービヒ(1803~1873年)の主著『化学の農業および生理学への応用』(ドイツ語初版1840年)、およびA.D.テア(1752~1828年)の『合理的農業の原理』(1809~1812年)の邦訳が初公刊された。これらにJ.H.v.チューネン(1783~1850年)の孤立国『注釈つき孤立国』(新編集版、ベルリン、1990年)を加えれば、農学3大古典の新たな揃いぶみということになる(註1)。

ドイツ再統一(1990年)後は、テアとチューネンをめぐる古典研究が活発になってきている。上記『孤立国』は、1990年従来「未公刊の草稿を駆使した注釈つき」で、H.レーマンらの編集によって新たに公刊されたものである。

また、チューネンの「第2の主著」(W.Engelhard)と呼ばれている膨大なノート類や約6,000通に及ぶ書簡類—いわゆる《チューネン・アルヒーフ》—(後述)についても、1997年ドイツ学術振興協会(DFG)の助成プロジェクトとしてその全目録が作成されており、その一環として書簡類がデータバンクに登録、ネット上で検索できるファインドブックができています。この研究助成プロジェクトの成果の一部が、すでにいくつか公刊されてきている(註2)。

最終的には《チューネン全集》の刊行を目的とするこのプロジェクトは、歴史的には4回目ともなる壮大な企画である(1回目は1905~1922年R.エーレンベルクらの企画、2回目はナチス政権下H.ニーハウスらの企画、3回目は《ホーエンハイマー・チューネン・アルヒーフ》(後述)の創始者G.フランツらの企画、いずれも中途挫折)。全集は15~20巻になるとも言われる膨大なもので、その刊行はいわゆるRostocker-Thünen-Forschung(ロストック・チューネン学派)の悲願ともなっており、今日まで継承されてきている。

このほか、《チューネン論争》(後述)の渦中の人であっ

たチューネン研究者A.ベートルゼン教授の遺稿『ヨハン・ハインリッヒ・フォン・チューネン—自叙伝にみる自画像—』(1,000枚を超える原稿)—東独時代には出版不可能であった—の出版計画も進行中である(註3)。

独学の市井人チューネンが、チューネン・アルヒーフに遺しているように書簡等でしか研究発表・意見交換の場をもち得なかったのに対して、ベルリン大学教授テアは実に450点余にのぼる著書論文等を公にしている。それでも、その中から編集して最近次の2つの資料が公刊された。

- ・『アルプレヒト・ダニエル・テア 1752~1828年：現代農学へのテアの遺産目録』ベルリン・フンボルト大学農業園芸学部(専門文書管理室)刊、ベルリン、1998年。
- ・『テア名言集』アルプレヒト・ダニエル・テア振興協会刊、メークリン、1998年(註4)。

テア研究の中心は、メークリンの《テア振興協会》Fördergesellschaft Albrecht Daniel Thaer e.V.と、テアの郷里ツェレの《テア協会》Albrecht-Thaer-Gesellschaft e.V.である。後者は古く、1764年来存続したツェレ王立農業協会—テアは1780年そのメンバーに任じられている—であるが、1933年テア批判のナチス政権発足によって強制解散させられた。戦後1952年テア生誕200周年記念事業として、テア協会に改称して今日に至っている。前者のテア振興協会は、ベルリン・フンボルト大学農業園芸学部を中心に、1987年以来続けられていたテア研究会(中心はVolker Klemm教授)を母体に、1991年メークリンに設立された。

両協会の最近の主な刊行物には以下がある。

- ・『今日テアはわれわれに何を語るか？ テアとその業績の意義と現代化コロキウム』テア振興協会刊『テア振興協会双書』第1号1992年。
- ・『農業と環境コロキウム：テアから現代にいたる土壌肥沃度問題』同上双書、第2号1994年。
- ・『第3帝国における農学。興隆か崩落か？(1933~1945年)』フォルカー・クレム編、1994年。
- ・『テアの地域への影響力と変革期における意義』同上双書、第3号1995年。

- ・『メークリンのテア 200 年』テア振興協会刊『論集・今日に生きるテア』第 1 巻, メークリン, 2004 年.
- ・『テアの活動と影響力』同上論集, 第 2 巻, メークリン, 2005 年.
- ・『ベルリン・ブランデンブルクにおける農学 200 年』同上論集, 第 3 巻, メークリン, 2006 年.
- ・『チューネン, テア, コッペ』同上論集, 第 4 巻, メークリン, 2007 年.
- ・『テアの弟子ウルフェンとシュブレンゲル』同上論集, 第 5 巻, メークリン, 2008 年.

その他, テア振興協会と出版社 DLG-Verlag の共同刊行になる『アルブレヒト・ダニエル・テア—農業に尽くした生涯』フランクフルト, 2006 年がある. またツェレのテア協会には, 最近パンネ, K. 編『アルブレヒト・ダニエル・テア—世界の至宝』ツェレ, 2002 年がある(註 5).

また, テア記念シンポジウムも開催され報告書等が公刊されている. すでに戦後東独時代の 1952 年, テア生誕 200 周年記念にドイツ農学アカデミー (DAL) 総会で, 記念講演『テア生誕 200 周年記念に寄せる批判的評価』(Asmus Petersen) が行われた(後述). 1978 年のテア没後 150 周年記念には, ベルリン・フンボルト大学主催で《アルブレヒト・テア会議》が開かれ(筆者も参加), 『テアの農学—伝統と今日性—』(ベルリン・フンボルト大学, 数学・自然科学紀要シリーズ 27 特集号)等が出されている(註 6).

ドイツ再統一後の 2002 年には, テア生誕 250 周年記念シンポジウム『持続可能な農村空間利用の展望』(フンボルト大学, テア振興協会等の主催)が開催された. また記念事業として, ベルリン中央のシンケル広場にテアの銅像が再建された(オリジナルの銅像は, フンボルト大学のテア・ホールにある). 関連してテアの活動拠点のメークリンには, 旧テア博物館の閉鎖に伴って新規に仮設展示施設が整備され, 新テア博物館として発足している(2008 年).

また, ライプチヒ大学のテア農学研究所も, 所報シリーズ第 8 巻でテア特集号『近代農業の創始者テアの遺産』(2003 年)を組んだ(註 7).

## 2) チューネン協会とチューネン・アルヒーフ

チューネンの歴史的評価を端的に表すものには, その史跡保存のあり方がある. 孤立国のテロー農場と居宅跡のチューネン博物館の歴史は, 40 余年前に遡る. 東独時代 1950 年代に起こったいわゆる《チューネン論争》は一同時期ソ連の農業生物学会で, 獲得形質の遺伝をめぐってイデオロギーがらみの遺伝学論争であった《レイセンコ論争》と並んで—農学界を二分する大きな論争として激しく行われ, チューネンの評価は地に落ちていた. その影響はドイツ再統一まで続き, チューネン研究の

「空白の 40 年」とも呼ばれている(後述). こうした状況のなかで, 史跡テロー農場も荒廃の極に達していた.

しかし, 1970 年代に入ってくるとロストック・チューネン学派を中心に, 少しずつ「用心深く」チューネンの再評価が進められるなかで, チューネンの歴史像転換の契機になったのが, 1983 年チューネン生誕 200 周年記念の《チューネン・シンポジウム》の開催(ロストック大学)であった(註 8). この動向は, 直ちに居宅跡の郡立チューネン博物館への格上げとなって現れた(1972~1988 年は単なる郷土資料館に過ぎなかった)が, 465 ha に及ぶこのテロー農場全体の総合史跡整備は遅々として進まなかった.

史跡保全への新たな転機は, ドイツ再統一の 1990 年に訪れた. この年はチューネン没後 140 周年に当たるといことで, 新しく《チューネン協会》—これは, 第 3 次の協会に当たる(後述)—が立ち上げられ, 所在地をこの博物館に置いて, テロー農場を国民的な文化財として地元の協力のもと保全していく推進母体が組織されることになった.

現在は, 1992 年連邦農水省の農村整備事業のいわゆる集落再開発(Dorfsanierung)の地区指定を受けて, ここにはレジャーランド的な青少年交流施設整備が行われ, 1999 年には建物 6 カ所, 利用面積 15 ha の運営に《チューネン・テロー農場公益有限会社》が設立され事業化されている.

しかし, 計画を担った新生チューネン協会の当初の考えは, もっとアカデミックな整備であった. テロー農場とチューネン博物館をロストック大学の付属施設として《チューネン研究所》を設けること, そのために連邦農水省補助事業の「共同課題」のうち集落再開発の地区指定ではなく—文教施設整備地区指定のもとで整備する案であった. この構想に対しては, 州からは代わりに農業史講座の閉鎖が条件とされるとともに, 国からはこの種のアカデミックな構想自体への反対が示された. さらにテロー農場の土地購入をめぐるでは大学評議会が反対するというので, ついにはロストック大学農学部自体の存続の必要性まで疑問視されるに至った. 事ここに至って州議会は農学部改革を打ち出し, 学部名を農業・環境科学部に換え, 農業エコロジー教程と農地利用・環境保全教程を支柱に学部再編を図る経過を辿った. 以上の経過は, その後のチューネン研究に大きな影響を及ぼすことになる.

新生チューネン協会の最初の大きな企画は, 1993 年チューネン生誕 210 周年記念事業として開催されたチューネン国際会議(ロストック大学)であった. この全報告は, 学会誌特集号(Berichte über Landwirtschaft, NF 210, Sonderheft, 1995)に収録されている(表題『ヨハン・ハインリッヒ・フォン・チューネン—学問的視点からの再評価—』). また 1993 年には,

チューネン協会北米支部 (Thünen Society, North American Division) 第2回年次総会がワシントン D.C. で開催されており、支部会長 Robert Peplies の『チューネン理論の過去・現在・未来』をはじめ、18報のチューネン研究が報告されている。

チューネン協会では、シリーズとして論集『テロー・チューネン紀要』を刊行している。

- ・シュバルツェ, R. 『リヒャルト・パツソウメクレンブルク出身の学識家—テロー・チューネン紀要, 第1巻, 2001年.
- ・『チューネン・アルヒーフの100年—1901~2001年ロストック大学における—』同紀要, 第2巻, 2002年.
- ・シュバルツェ, R. 『L・A・シュタウディング—農学校でのクロープストックとフォークト』同紀要, 第3巻, 2002年.
- ・『テア・チューネンの伝統と農村空間の発展 (チューネン生誕220周年記念)』同紀要, 第4巻, 2003/2004年.
- ・『テロー・チューネン農場の歴史—テロー・チューネン博物館の30年—』同紀要, 第5巻, 2005年. (以下, 続刊)

なお, 以上の研究資料に密接に関係する基本文献として落としてはならないものに、『ペーテルゼン教授生誕100周年記念メモリアル・コロキウム』ロストック大学, 2001年, がある (註9).

チューネン協会の歴史は古く, 時どきの政治の動向にふり回されてきた苦渋の過程がある。チューネン協会 (第1次) は1930~1934年ロストック大学に設立された。法経学部 R. エーレンベルク教授とその助手 R. パツソウによって担われた《チューネン・アルヒーフ》の整理事業 (1905~1922年) が, エーレンベルクの死によって頓挫してしまい, その後同アルヒーフは顧みる者もいなくなって荒廃していく。それでも1930年, 同大学の教授らが中心になって, チューネン生誕150周年を記念して《チューネン協会》を立ち上げ, W. ゼードルフと H. J. ゼラフィム編『ヨハン・ハインリッヒ・フォン・チューネン—研究者の功績評価の試み—』(1933年) を刊行した (註10)。しかしながら, この第1次のチューネン協会はゼラフィム会長自身の提案によって—突然, 会則にも反して—1934年に解散した (1933年は, 初期にはチューネン批判の国家社会主義ドイツ労働者党 (NSDAP) のナチス政権成立)。

第2次のチューネン協会の結成は, 大戦時の1943年ロストック大学に新設の農学部においてであるが, これも1945年ナチス政権崩壊までで短命に終わった。この時のチューネン協会の総裁は第3帝国最後の農林大臣ヘルベルト・バッケ (Herbert Backe) —当時は事務次官であった—, 副総裁はメクレンブルク州国務大臣フリー

ドリッヒ・シャルフ (Friedrich Scharf), そして専務には, ロストック大学に1942年新設された農学部—《チューネン・アルヒーフ》のために—チューネン研究家として名声の高かった A. ペーテルゼンを農業経営学教授に迎え入れて就任させた。

これは, ナチス政権内のチューネン評価が変わったのであり, 当時は“Thünen-Rezeption” [チューネン受け入れ] と呼ばれた。もともと地政学の研究者であったバッケは, 1940年の初めからチューネン孤立国の政治利用を主張し, 中心地ドイツの覇権のもとヨーロッパ農業圏域全体の再編を目論むという, 第3帝国構想の理論的支柱にすることを旨としたのであった。上記シャルフ大臣宛へのバッケの手紙では, こうした観点から, 遺稿として残されている《チューネン・アルヒーフ》—1901年以来ロストック大学法経学部に保管されていた—の徹底吟味は, 「今日の農政部門で学問上の最重要課題の1つである」(1943年) と指示していた (註11)。

そのため, 当時赴任したばかりのイェナ大学教授であった A. ペーテルゼンのロストック大学への招聘と, 同上アルヒーフの受け皿とすべく同大学に農学部を設立することになる (ペーテルゼンは, 当初同上アルヒーフを管理してきた法経学部教授として人事選考されたが, 管理責任者 H. ニーハウス教授との管理主導権争いの結果否決された, その結果でもあった)。同時に, 同上アルヒーフの業務執行にチューネン曾孫のウエンクシュテルン (Hermann von Wenckstern) が任ぜられ, こうして研究面ではペーテルゼンが, 実務面ではウエンクシュテルンが担当する体制で, チューネン・アルヒーフが整うことになった。そして, これを支援する社団法人チューネン協会に対しては, 実に年間28万5,000マルクの破格の予算がつけられた。中心の研究プログラムはチューネン全集の刊行にあった。しかし, 実際には同上アルヒーフ資料の写しとともに拡大する戦禍からの安全確保に限られていた (州都シュヴェリーンへの疎開)。

遺稿を利用して編集された7種の版のある『孤立国』の異本の存在でもわかるように, チューネンの《第2の主著》(Engelhardt, W. W.) とも称されるノート書簡類を含む《チューネン・アルヒーフ》には, ロストック大学での100年の歴史がある。それは梱包数で150束以上, ほぼ延べ12mにも達する文書量であって, 15分類からなる形で現在は大学公文書室に収納されている (1972年以降)。

同上アルヒーフの歴史は1901年に始まる。ロストック大学は—出版時には顧みられることの少なかった『孤立国』初版1826年発刊後, わずか4年目にして同大学哲学名誉博士の称号を与えている—法経学部教授 R. エーレンベルクの主導によって, 遺稿の所有者であるチューネンの孫 Alexander von Thünen と大学との間で, 次のような譲渡契約が取り交わされている。

「農業顧問ヘルマン・シューマツヘルはアレキサンダー・フォン・チューネンの委託を受けて、前記遺稿の所有を以下の条件付きで貴国家学ゼミナールに譲渡する。この遺稿は《チューネン・アルヒーフ》の名称のもとに、貴国家学ゼミナールによって偉大な国民経済学者チューネンの名に相応しい形で保管し、整理し、一覧表に登録して、学問的な利用の便に供すること」(1901年1月8日)。

R. エーレンベルク教授は、大企業クラブ社とジーマンス社から資金援助を受けて—当時は学問の独立性の視点で猛烈な批判が巻き起こった—チューネン研究基金を設け、1905～1922年まで続く《チューネン・アルヒーフ紀要(精密比較経済研究機関誌)》(Bd. 1～9. Jena, 1906～1922)を発刊した。中心となったのが、当時の助手リヒャルト・パツソウであった。著名なスイスの農業経営学教授E. ラウルもそのメンバーの一人であった。しかし、この事業はエーレンベルクの私益のために行われたという批判があるように、たいした成果はあがらず「チューネンの遺産からは、たったの18ページのテキスト」(Brauer, Walter)しか残さず、エーレンベルクの死後(1921年)は、チューネン・アルヒーフは次第に忘れられ、荒廃の一途を辿っていく。

やがてワイマール共和国の崩壊と1933年ナチス政権の樹立後、既述のように第3帝国の覇権的農業政策の理論的支柱としてチューネンの見直しが始まり(いわゆる“Thünen Rezeption”), チューネン研究の高揚の時を迎える。

だが、敗戦によって事態は一変する。当初の間は従来どおり、ペーテルゼン教授が研究を主導し、チューネン曾孫のウェンクシュテルンが専任管理者として、チューネン・アルヒーフは1950年までのチューネン全集の刊行を目的に独立の研究施設として研究は継続されていた。

しかし1950年代に入ると、第3帝国時代のチューネン研究における農学部長ペーテルゼン教授の役割—帝国農林大臣H. バッケの腰巾着と呼ばれていた—が、マルクス・レーニン主義者の非難攻撃の標的になってきた。きっかけは、1950年科学アカデミー総会で行った農学アカデミー(DAL)会長ペーテルゼン教授の講演『新時代のロストック・チューネン研究—チューネン没後100周年記念に寄せて—』である(註12)。そこでは、チューネンの功績は農業立地論、自然労賃論、経済学方法論の3分野にあること、社会主義農業計画の基礎となる20の「農業生産地帯」区分はチューネン立地論に即して行われるべきこと、またその自然労賃論や退職農業労働者の老人ホーム建設等に示される社会改良家としての実践等から、チューネンを「最後の偉大なユートピア社会主義者」と断じたのであった。

この主張に対しては、同じロストック大学経済学部教授のレムニッツ(Alfred Lemnitz)やルック(Herbert

Luck), さらには当時農学アカデミー農業史部会長であったリッター(Kurt Ritter)もその黒幕として、マルクス・レーニン主義の立場からチューネンを資本家的ユンケル経営のイデオログといった視点で批判して、あたかも「学部間戦争」の様相を呈した。そして、遂にはドイツ社会主義統一党(SED)の査問会議にかけられ—ペーテルゼンは戦後入党していた—、さらには国家評議会議長ウルブリヒトが声明を出して警告する(1955年)といった事態にまで発展した。

以上が、《チューネン論争》と呼ばれたものの経過である。その結果、1957年には教授の職を追われ、農学アカデミーの草地試験場に左遷されることになった。同時に、チューネン・アルヒーフ自体も独立機関としては閉鎖されて農学部へ併合された。20年余にわたって(1943～1960年)、同アルヒーフを管理してきたチューネン曾孫のウェンクシュテルン教授も、その78歳の年齢にもかかわらず西側へ亡命することになった。1972年には同アルヒーフはロストック大学の公文書室に移管されて、現在に至っている。いわゆるロストック・チューネン学派の肅正である。以降チューネン研究はタブー視され、チューネン研究の「空白の40年」(B. ü. L., a. a. O. S. 13)と言われる影響を残した。

シュツットガルトのホーエンハイム大学に、《ホーエンハイマー・チューネン・アルヒーフ》が新設されたのもこの時期であった。この大量のチューネン遺稿の一官憲の目をくぐりぬけての—西側への「避難」は、スリリングなものであった(前掲『チューネン・アルヒーフの100年』テロー・チューネン紀要第2巻S. 58～62)。このチューネン論争のさなか、チューネン遺稿の存続を危ぶんだウェンクシュテルン教授が、1958年チューネン生誕175周年記念の農業史学会(西独オルデンプルク)に参加したホーエンハイム大学のフランツ教授(Günther Franz)とゲッチェンゲン大学アーベル教授(Wilhelm Abel)に対して(A. ペーテルゼン教授は「謹慎」中で学会不参加であった)、自分の「私的」なチューネン遺稿(いわゆる“Thüniania”)を西側に預けたいという申し出をしたことに始まった。フランツ教授はこの申し出に早速飛びつき、その後ドイツ学術振興協会DFGの資金を得て、巧妙な手口でホーエンハイムに搬出された。

1959年創設のこの《ホーエンハイマー・チューネン・アルヒーフ》は、チューネン家アルヒーフ(Familien-Thünen-Archiv)とも称されているように家族文書に特色があるが《ロストック・チューネン・アルヒーフ》の写真コピーや手写し資料も多い。第1表が両アルヒーフの内容一覧である。

チューネン・アルヒーフには、もう1つ《ヘッセン・チューネン・アルヒーフ》もあった。これは1950年チューネン没後100周年記念に、ヘッセン州マールブル

第1表 ロストック大学とホーエンハイム大学のチューネン・アルヒーフの内容一覧  
(太字部分は両アルヒーフで異なる内容の資料部分)

ホーエンハイマー・チューネン・アルヒーフ 〈核心的資料の部〉 C-チューネンの資産 1806-1850 D-テロー農場の経営・計算書類 (D-10, 11 欠) E-原稿・ノート類 (若干の欠落あり) L-テロー農場簿記とりまとめ N-手紙類	ロストックカー・チューネン・アルヒーフ 〈核心的資料の部〉 C-チューネンの資産 1806-1850 D-テロー農場の経営・計算書類 E-原稿・ノート類 L-テロー農場簿記とりまとめ B-手紙類
〈チューネン家文書の部〉 M-一身上の資料 M-一身上の資料 R-チューネンの祝い事  S-チューネン研究 V-チューネンの蔵書と文書 T-文献 W-画像集	〈収集資料の部〉 A-チューネンの人物に関するもの I-チューネン家とチューネン研究に係わった人物 G-チューネン・アルヒーフ, チューネン研究, チューネン協会 G-(同上) G-(同上) チューネン蔵書 画像集
O-v. Wenckstern による古い私信の私的収集 P-日誌, 記録, 詩文, 警句 Q-農場運営 U-v. Wenckstern の刊行物 (1906-1957)	F-印刷済み原稿 M-他者の農業経営 N-農業経営・農作業関係 O-1950年以降の構築

資料: Fellmeth, Ulrich: Das Rostocker und das Hohenheimer Thünen-Archiv. In: 100 JAHRE THÜNEN-ARCHIV an der Rostocker alma mater 1901-2001. Tagungsband zum Kolloquium am 14. Nov. 2001. Rostock-Tellow 2002 (Tellow Thünen-Schriften Bd. 2) S. 62.

ク大学のチューネン研究家ブレウエル教授 (Walter Braeuer) によって創設された。印刷物 56, 原稿 54, 新聞スクラップ 12, 複写 1 点から成る。これらは後にロストック大学の同上アルヒーフに寄贈合体されている (註 2④ 参照)。

## 2. 古典研究史におけるテア・チューネン像

テア-チューネン-リービヒは、近代農学の歴史では相並ぶ古代ローマの 3 頭政治にも例えられる影響力をもつ。しかし、その有為性の変転は世の常であって、時代は常に自ら欲する人物に新しい英雄像をつくり出す。しかし同時に同じ時代にあっても、価値観を異にすれば違った歴史像として現れる。

### 1) 同時代のテア・チューネン像

テアの活躍する 19 世紀前半においてさえ、すでにその学説の評価には賛否相半ばするものがあり、以下 3 つのグループに分けられる。

第 1 は、テアの合理的農業論に反発するドイツ・ロ

マン学派で、中心はアダム・ミュラー (Müller, Adam H., 1779~1829 年) である。テアの推進するイギリス型の「近代化」に対して、農地改革によって既成の特権を失う封建的ゲーツヘルの立場から、真っ向から反近代化の「ゲルマン農本主義」を展開する (註 12)。そして、このミュラーの主張は 20 世紀前半の国家社会主義 (NSDAP) の「血と土 (Blut-und-Boden)」の農政イデオロギーに強く継承されていく。

第 2 のグループは基本的にはテアの合理的農業論の正当さを認めるものの、その内容のいくつかにクレームを付けるもので、コッペ (Koppe, J.G. 1782~1863 年)、チューネン (1783~1850 年)、シュルツェ (Schulze, F.G. 1795~1860 年)、それにリービヒがいる。シュベルツ (Schwerz, J.N.H.v. 1759~1844 年) もこの部類に入ろう。

コッペとチューネンは、テア輪裁式農法のいわゆる「絶対的優越論」に対して、自然的、経済的な条件次第という「相対的優越論」を主張した (註 13)。シュルツェ

はいわゆる「経営学方法論論争 (Methodenstreitigkeiten)」の火付け役として、テア農学の「国民経済学による学問的基礎づけ」の主張とともに、テアのメークリン・アカデミーモデル、すなわち理論と実践合体のホッホシュレ方式を批判して、応用自然科学としての農学の観点からユニベルジテート方式による研究教育を提案して主張をリービヒ学派に引き継ぐ(註14)。『ベルギー農業論』1807～1811年の著者シュベルツは、農民的家族経営の小農論という点でテアの大農論とは異なる。リービヒはそのミネラル学説によって、当時主流のテアのフムス学説を否定する。そして、輪栽式については、「どのような土壌肥沃度にあっても最後には土壌を枯渇させてしまう地力略奪農法の究極の段階である」として、輪作原理を否定し去った(註15)。

けれども第3の大多数のグループは、テアの合理的農業の熱狂的ファンであった。これは、当時農業者だけでなくゲテヤフォンターネラ文学者の称えるところでもあったし、国内外の関係団体等の名誉会員に推挙されたこと38件を数えたことから明らかである。

## 2) 19世紀後半からワイマール期のテア・チューネン像

テアの『合理的農業の原理』全4巻1809～1812年は、初版以来版を重ねて約70年後の1880年には、最後の版として38版目が当時著名の農学者4名の編集によってベルリンで刊行されている。その編者まえがきでは、「たとえ細部にわたれば日進月歩の農学と技術進歩によって時代おくれになった点があるとしても、本書は今日でも陳腐化せず、今でもどのような農業者にとってもなお最も豊かな宝の山であり続けている。その叙述はきわめて平明であり、その判断はきわめて正確であるので、読者は改めてテアの農業知見と才能に驚嘆せずにはおれない」と称えられている。

一方ではそうであるが、他方ではこの期はいわゆる《リービヒ王朝》(J. Pohl)を中心に自然科学と農業の生産学万能の時代風潮のなかにあつて、19世紀前半農学の主流をなしてきた《テア王朝》(同上)の衰退が進むことになる。特に農業経営学分野では、その「クンスト・レーレ(組織と管理の術)」化に対するリービヒ学派による「魂を失った処方箋の学 (geistlose Rezeptologie)」との批判が加えられて、上記シュルツェをはじめ、J. ポール、K. ビルンバウムらの農業経営学の体系化の試みに発展していく(註16)。また、全ヨーロッパに普及したテアのホッホシュレ方式の農学研究教育制度も、リービヒ学派推進の総合大学の農学部方式に取って代わられて、今やわずかにボン/ポッペルスドルフ、シュツットガルト/ホーエンハイム、ミュンヘン/ウァイエンシュテファンの3校を残すのみになった。それでも、ワイマール共和国時代(1919～1933年)に迎えたテア没後100周年記念(1928年)には、テア顕彰の2つ

の刊行物がハノーファ王立農業協会(後のツェレ・テア協会)と農業史学会から出されている(註17)。また、10マルク紙幣の「顔」としても顕彰された。

しかし、この19世紀終わりの農業恐慌(1870～1890年代)と資本主義の全般的危機のなかで、1920～1930年代の農業大恐慌を迎えるといった新しい時代状況にあつては、テアの意義も変わって捉えられてくる。

この時期、エーレボー(Aereboe, Friedlich 1865～1942年)はその『農業経営学汎論』1917年の序言で、次のようにテアを批判している。

「ドイツ農業の偉大な改革者であるテアは、前世紀の当初においてはその合理的農業の原理によって完璧の体系性を与えてくれたが、今日のわれわれに残してきているものは少ない」。

農産物の生産過剰の時代には、粗収益の追求と純収益目的追求の予定調和は破綻するわけで、可能的最高の純収益の追求の最適化が求められる。こうして、エーレボーはその経営集約度理論の構築にあたって、『チューネン・ルネサンス』—1826年『孤立国』発刊以降、大方は埋もれたままであった—を主導した。チューネンの数学的微分法の適用による経済的最適化手法、いわゆる限界生産性分析を自らの経営理論の中心に据えて、集約度限界を明らかにした。また、加えてブリンクマン(Brinkmann, Theodor 1877～1951年)もその農業立地論を、チューネン孤立国での輸送費による空間分化作用を基礎に精緻化を進めた(『農業経営経済学』1914年)(註18)。

## 3) ナチス期における古典研究の変態

テアの評価は、この国家社会主義の時代に入ると一変する。《公益は私益に先ず》のモットーで「ブルド・ワント・ボートン血と土」のNSDAPのイデオロギーは、テアの営利事業としての農業の自由主義とは相反する。ここでは職分としての農業であり、目指すべきはドイツ国家の可能的最高の自給度の達成である。反自由主義、反テアのキャンペーンは激しく、「利己愛と利殖を求めユダヤ的な自由主義精神の持ち主」(das Kind jenes liberalen jüdischen Geistes)としてテアをやり玉にあげるとともに、その農地の自由売買や大農主義等が批判された(簿記や農場評価、生産技術論は継承された)。経営学の名称 Betriebslehre も変更され、「能率学 Leistungslehre」や「利用学 Nutzungslehre」になった。エーレボー・ブリンクマンの著書は、この時期発禁処分になって、ブリンクマンはその後は無難な作付方式論に専念するしかなかった。

しかし、チューネンの評価は違った。あのクルト・リッター(Ritter, Kurt 1894～?)—東独時代、浩瀚な『資本主義の農業経済と農政学』1955年を著した—は、この時期チューネン生誕150周年記念論文(1935年)で、「チューネンはテアと違って、最高の収益性、最高の

利潤を経営目的に設定することなく、公益に資する道を追い求めた」と言っており、国家社会主義的チューネン像を描いてみせた（註19）。

当時エーレボアの下での講師からイエーナ大学教授に推挙されたA. ペーテルゼン（1900～1962年）も、その就任後の初講義として『ヨハン・ハインリッヒ・フォン・チューネン立地論の基礎—これまで立地論がいかに集約度論として誤解されてきたか、また立地論のもつ今日的意義は何か—』（1936年）を公刊する。さらには、チューネン研究のためロストック大学に新設された農学部の創設者教授として、『チューネン孤立国—国民経済の一環としての農業—』（1944年）を書いている（註20）。この両著は、チューネン研究史上画期的と注目されており、特に後者は今日でもチューネン研究の「スタンダード・テキスト」（Viereck, G.）と称されている。

この期にいわゆる“Thünen-Rezeption”は、帝国農林大臣H. バッケ主導による第3帝国の覇権的農業政策の理論的支柱のためであった。大臣バッケによれば、「チューネン理論の価値は、その環状圏域の体制ないし集約度体系の考え方をヨーロッパ全体に拡大できることにある。確かに環状圏域の形にはならなくても……その代わりに国や地域が現れる。そこで生産を促進し、拡大チューネン圏から中心地ドイツに向けて再び還流させることで、海外との競争に打ち勝つことができる」であった（註8 S. 126～130 参照）。また、チューネン協会の発会式にあたっては、NSDAP党機関紙に『ヨハン・ハインリッヒ・フォン・チューネン。その著作と今日的意義—チューネン協会発足に寄せて—』を掲載し、「重大な戦局と多大な戦費の要にかかわらず、チューネン協会設立には確たる理由のあること……チューネン全集の刊行は今日わが帝国とヨーロッパ大陸に突きつけられている課題解決の指針を示し得ること……さらには今日の困窮の時代にあってもチューネンは単に偉大な農政学者、経済学者にとどまらず、国家民族の統一とヨーロッパ社会生存の秩序を構築していくための方途と可能性を指し示しているドイツの国政家でもあること……」という解説記事が書かれた（Parteipresse-Sonderdienst, Nr. 129, 5. 6. 1944, Backhaus, Karlheinz. Zit. in ebd.）。

#### 4) 戦後期における古典研究の分断

1952年はテア生誕200周年記念の年であったが、戦後の混乱のなかでは何ら記念事業の開催には至らず、両ドイツで個別に2つの論文が著されただけで、ナチス期でのテアの扱いについて名誉回復はなされなままであった。いずれの論文も—ナチス期とは違って—テアの肯定的評価に転じている（註21）。

戦後期における古典研究の大きな分断は、1950年代のいわゆる《チューネン論争》であった。これによってチューネン研究の「空白の40年」が生じた。逆に、テア研究は《テア・ルネサンス》（Klemm, Volker）と

呼ばれるほど多くの研究が生まれ、むしろテア理論の過度の現実有効性を戒めるほどであった（註22）。

チューネン論争の直接のきっかけは、当時ロストック大学の農学部長で農学アカデミー会長でもあったペーテルゼン、A. の講演『新時代のロストック・チューネン研究—チューネン没後100周年に寄せて』（1950年7月6日科学アカデミー総会講演）であった（註23）。ここでは、新時代に迎合してチューネンを科学的社会主義に先立つ最後のユートピア社会主義者と規定し、加えてチューネンとそのテロー農場の実践を社会主義農業建設のひな型と見なし得ること、その農業立地論は社会主義計画経済の政策手段になることが論じられた。

これに対して、彼のナチス期の言動に日頃から反感を抱いていた同大学経済学部のA. レムニッツ（後の東独国民教育相）やK. リッター、H. ルックらが、マルクス・レーニン主義の立場から激しい非難を浴びせし、最後は国家評議会議長ウルブリヒトが党中央委第24総会で、「農学各分野を前進させるためには経済学の重要分野である農業経済学の怠慢にピリオドを打つことが必要である。わが国のマルクス・レーニン主義農業経済学の仕上げは、チューネン理論とマルクス・レーニン主義経済学とを調和させ農業経済学の理論基礎にしようとする試みによって邪魔されており……、《新時代のロストック・チューネン研究》の代表者によるチューネン理論への飽くなき固執とチューネン著作に対する科学的論争の拒否とは、わが国の農業経済学の研究教育のマルクス・レーニン主義的基礎によるプログラムの仕上げを著しく阻害している」と報告した（註24）。

こうした状況では、ペーテルゼン教授はチューネン論を公にはできず、もう1つの専門分野の草地論に専念することになる。しかし、自宅では密かに研究を続けており、その死後机上には1,000枚を超す未定稿のチューネン論が残されていた（既述）。この草稿は、現在テロー・チューネン博物館で公刊の日を待っているという。

他方では、いわゆる“Thünen-Rezeption”は一時期（50年、60年代）西独でも実際の農政課題の枠組みで取り上げられた。それは、大戦後マーシャル・プランの受入れ体制として出発した欧州経済協力機構OEECのなかで、ヨーロッパ農業同盟を支える理論的支柱としてである。そのため第3帝国最後の農相バッケの再評価さえ行われ、その著書の再刊の事実もある（註25）。これも—《チューネン論争》の場合と同様に—一周辺諸国から大きな反発を招いた。

以上、この期の経過はチューネン立地論の乱用を示すものとして、古典研究史に留められておかねばならない。

チューネン研究の停滞に対して、この期のテアは《テア・ルネサンス》の様相を呈した。食糧難のこの時期は食糧増産が最重要課題であった。東独でも、農民経営の集団化を終えたばかりの農業生産協同組合や国営

農場では、生産の集約化が問題で、ここにテア農法論が復活することになる。

日本でも、この期は《農地改革から農業改革へ》の時代状況のなかで、いわゆる農法論研究の新領域が開拓される。当時喧伝のソ連のウィリアムス農法やミチューリン農法、さらには民科（民主主義科学者協会）によるルイセンコ学説の導入といった一連の農法研究の動きのなかで、西欧・中国古典農法への関心が高まった。英国の『馬糞農法論』（Tull, Jethro）やアーサー・ヤングの『収利的農業論』、テア輪裁式農法論、中国古農書『齊民要術』にみる乾地農法などが研究され、いくつもの成果が得られた（註26）。

このような動向のなかで、次第に古典研究の脱イデオロギー化が進んでくる。70年代、80年代になると本来の学問的研究への反省の気運が生まれ、それぞれ関係ある大学で記念事業が行われている。

テア没後150周年記念の1978年には、ベルリン・フンボルト大学では《テア農学—伝統と今日性—》のテーマで、テア国際会議が開催されたし（註6参照）、1983年チューネン生誕200周年には、ロストック大学で《チューネン・シンポジウム》が開催された（註7参照）。

### 3. 今日の古典研究にみるテア・チューネン像

ドイツ再統一（1990年）以降は、情報の透明性の高まりのなかで古典研究の姿は多様である。テアについては、従来の礼賛型の評価から否定的な評価まで現れているし、チューネンについては、従来未公開の《チューネン・アルヒーフ》の新資料を利用しての新展開がみられる。そして両者に共通して、土地利用の持続可能性とアグロエコロジーの見地からの新開拓が、今日の古典研究によるテア・チューネン像の共通の特徴になっている。

今日のテア像には基本的に3つの見地がある。第1は、テアを近代農学の始祖としてその考え方や提案はドイツ農業の発展に大きく貢献するものであったし、その多くは今でも通用するという代表的な見地である（既述シリーズ『テア振興協会双書』、『論集・今日に生きるテア』の各巻号所収論考）。

第2は、テアの評価は高いものの、それは学説史上の単なる一教義としてであって「時代おくれ」と見なし、実際上の今日的意義を否定する考え方である。その代表的見地では、歴史的にみてもドイツ農業がテア・モデルによって三圃式から輪裁式に移行したわけではないこと（既に事実上混在していた）、リービヒのミネラル学説によってテアの輪作原理とフムス学説は時代おくれになったこと、今日的意義があるとすれば簿記方式と土地評価論のみとして、テアがいかにその時代に規範的な農法を示し得たとしても、それは結局は歴史上の事柄

に属することと評価された（註27）。この種の考え方は、最近のドイツの教科書にも広く散見される見方となっている。

第3の見地は、テア学説のエコロジー視点からの見直しである。この見地には賛否の両極端がある。一方には、テア生誕250周年記念シンポジウムの共通テーマ《持続可能な農村空間利用の展望》2002年の各報告（例えば『エコロジー視点からの土地利用』Haber, W.）のように第1の見地にも多く重複している—新しい理論構築のための支柱に位置づけようとする視点である。しかし他方では、まったく逆の否定的な見直しのグループもある。これは「エコロジー原理主義」（Klemm, Volker）とも揶揄されており、在りし良かりし昔の家族経営的エコロジー・ユートピアの観点から、リービヒの農業化学化による環境負荷の増大と並んで、テアの合理的農業論と農業集約化も、自然のエコロジー均衡を破壊した「仮借なき自然搾取者」と捉えている（註28）。

近時の古典研究の関心事が環境・エコロジーに移ってきているのは、チューネンについても同じである。特にチューネン研究の中心をなしてきたロストック大学農学部では、既述のように学部存続の命運を賭けた改革構想論議のなかで、チューネン研究にもアグロエコロジーと環境適合的土地利用の今日的視点が強く求められたという事情も加わる（註9⑥参照）。1996年の『ロストック大学農業・環境科学論集』第4部には、『チューネンの知見による環境適合的土地利用方式の評価』（Köppen, D.）や、『チューネン—メクレンブルクの畜産とエコロジー農業の推進者—』（Mathes, H. D./Kautschek, G.）といった論考が掲載されている（註29）。

また、『孤立国』や《チューネン・アルヒーフ》のアグロエコロジー的観点からの利用可能性について、チューネン協会会長タック教授（Tack, Fritz）らは、以下の諸点についての理論開拓の展望を呈示している（註30）。

- ① 環境適合の土地利用と持続可能な農業生産の問題（「持続可能性」とその判断基準の解明、「アグロエコロジー」の概念規定への寄与）
- ② 農村空間分化の経営経済的視点（農業立地論の環境政策への適用）
- ③ 土地利用の目標設定（エコノミーとエコロジー目標の「妥協」の最適化問題の解明）
- ④ 土壌肥沃度論発展への展望（「農業重学」の再評価による地力論争への寄与）
- ⑤ アグロエコシステム間の相互作用解明の問題。

### 4. まとめに代えて：理論の迂回生産ということ

近時、農学部の功利主義的改革の渦中で、農業史や学説史、農学原論といった分野が疎んじられてきていることは否めないところであろう。しかし、歴史を欠く発展



はない。テアによれば、過去には未来への鍵があると言う。すなわち「……過去に遡ること、そこに事物の推移に方向性を与える法則を求めることである。過去には未来への鍵がある」(註4②, S.12 参照)。

過去の学説史研究については、その方法論をめぐって2つの見解が対立する。1つは“Dogmengeschichte”(「学説史」)として捉える歴史的アプローチと、他は“Theoriengeschichte”(「学史」)として捉える理論的アプローチである。前者は研究成果の歴史として、過去の学説をいわば博物館的に年代順に展示・羅列していくやり方になる。これに対して、後者は研究手法の歴史として、特定の問題毎に過去の学説の問題解決手法と分析ツールの発展を捉えていくやり方である。両者の違いが典型的に表れているのは、K.マルクスの『剰余価値学説史』である。すなわち、F.エンゲルス版ではそれを『資本論・第四巻』と位置づけて編集したのに対して、K.カウツキー版ではそれを資本論の単なる「歴史的補巻」と位置づけて編集した。その結果、編章構成等内容が大きく異なったものになっている。

理論・学説を特定の時代の所産として捉え、それを忠実に追思考していくという歴史的アプローチは、もとより学説史研究の基本である。しかし、その意義については従来から一方で研究者の「主体性の涵養」にありとする積極的な見解もあるが、他方では「学説史とは体系の奴隷である」として、理論研究のための単なる「刺身のツマ」に過ぎないとする消極的な見解まである。こうしてJ.B.セーのように、「馬鹿げた誤謬、当然に捨て去られた学説を掘りかえすことは無益かつ無用であり、実に誤謬なるものは学ぶべきものではなく、忘れられるべきものである」、それゆえ「科学の歴史は、その科学が完成すればするほど短縮される」ということになりかねない。

これに対しては、J.A.シュムペータ『経済分析の歴史』のように、学説史研究は理論研究がいつでも取り出し得る「分析用具の倉庫」とみる見地もある。学説史研究に理論分析のツールの技術的成長を求めるといふ、いわば偏理論的、唯理論的になりやすいアプローチである。

以上、学説史研究にとっては歴史的アプローチは不可欠の前提作業であるし、分析ツールの自己発展とみる理論的アプローチには、一般に形而上学的独断のリスクと非歴史性の弊をみることもできる。それゆえ必要なことは、両アプローチの総合的方法である。そして、両アプローチを結びつける総合化の接点はいくまで「現在の地点から」といふこと、すなわち歴史的アプローチを通じた現状分析理論の迂回生産ということにある。この意味で、学説史家は歴史家であると同時に理論の開拓者でなければならないという指摘は正しい。学説史研究が単に訓詁学レベルに終わらないためには、過去の学説の今日的意義を求めることが重要であり、また古典とされてき

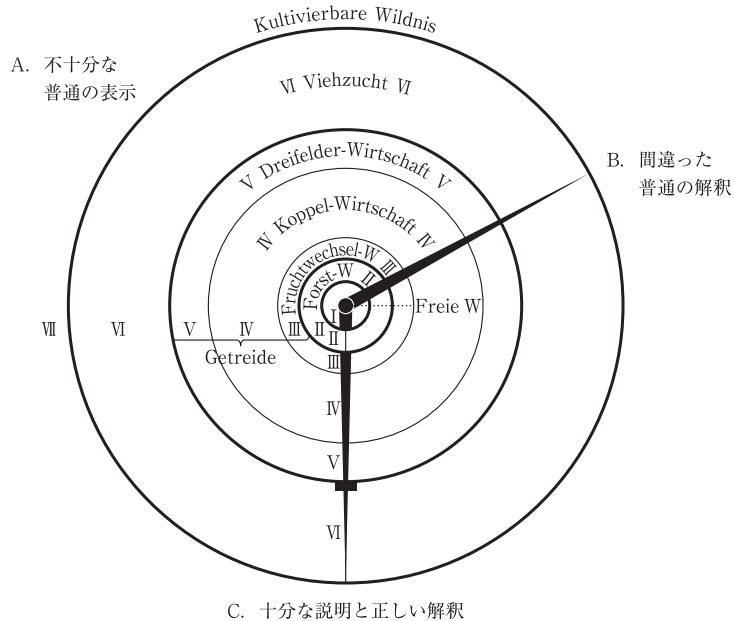
た学説は、多様な読み方に耐える多面的な規範性を有するのが常である。

従来からテアとチューネンの農法論については、前者の輪裁式農法の絶対的優越論に対する後者の相対的優越論の形で、農法の相対的な経済有利性の面が論じられることが多かった。さらに、食糧不足時代には生産力高度化理論として地力再生産(雑草防除)方式の量的なフロアの観点から、地力単純再生産方式の三圃式、前期地力拡大再生産方式の穀草式、後期地力拡大再生産方式の輪裁式として位置づけられてきた。しかし、今日の食の安全と環境負荷増大が問題になる時代には、農法論に求められるのは地力再生産方式の地力ストックの質が問われていることになる。テアはこの地力再生産メカニズムを「化学的農耕論(施肥)」と「力学的農耕論(耕耘と土地改良)」の2つの柱で明らかにしたが、今日の見地からは第3の柱として「土壌エコロジーの農耕論(土壌小生物と土壌微生物)」といったバイオの農耕論の理論開拓が求められる。フムの生み出す土壌微生物等による「土壌顕効度」概念を媒介項に置くことで、化学的農耕論と力学的農耕論を今日的に生かせる道が拓けるのではないのか。

科学史の分野でも、従来はリービヒとシュプレングル(Sprengel, P. C. 1787~1859年)はミネラル学説と最小律の法則の創始者の座をめぐって論争が行われてきたが、最近ではむしろシュプレングルをより高く評価する考え方が生まれている(註31)。テアの内弟子シュプレングルのミネラル学説は、フム学説の全面否定のリービヒと違って、フムとミネラルとの相乗作用—ミネラルの養分化はフムを媒介し「び爛剤」として、いわゆる「フム酸」ないし「フム酸塩」の形でミネラルを可給態化できるといふ一の結果と捉える点にその独創性がある。またフムや土壌微生物といったエコロジーの地力再生産の問題は、いわゆる「自然地力」や収穫漸減則、熟畑化効果、耐肥性、乾田化効果など、従来からの農業重学上の難問の解決への道を拓くことも期待できよう。もともと農法を構成する生態学的な補償原理と輪作原理自体が、つまりは地力概念自体が因果則として一義的には解明されておらず、経験則として指定されているところが多いからである。

テア理論の新しい研究の1つとして注目されるテアの農村計画論も現れている。『テアと農耕景観の美学的造成』(Pruns, Herbert, 2002年)は、アーサー・ヤングの“ornamented farm”論を手掛かりにしたテアの農村計画を論じて、環境指標論を展開している(註32)。

チューネンについても、既述のように今日的視点からの理論開拓が試みられている。かつて御大W. ロッシャーが、「わが学問がいつの日か廃れることがあってもチューネンだけは再び生き返る」と予言したことを受



第1図 チューネン圏とニッチ市場

- 1) 集約度序列の中断 I 圏：乾草（市場近接だが粗放）。
- 2) 集約度序列の中断 II 圏：木材（市場近接だが粗放，建築用木材は燃料用木材より市場遠隔的だがより集約的，籠細工用キヌヤナギとオーク樹皮はもっと市場遠隔的だが，もっと集約的）。
- 3) 集約度序列の中断 VI 圏：アマは市場遠隔的だが集約的；種子採取は市場遠隔的だが集約的；火酒は市場遠隔的だが集約的；砂糖は市場遠隔的だが集約的。

けて，1993年チューネン生誕210周年記念シンポジウムを主催したシュターマ教授（Stamer, Hans）は，その冒頭で「今日チューネンの著作をただ博物館に並べて感心するだけのものにしてはならない，われわれ後代の世代が銘記すべきは，今日の諸問題をより良く解決できるようにそれを活用することである」と提言している（註33）。

彼自身はチューネン立地論に依拠して，各作物の立地指数として単収に運賃率を乗じた「地代指数」（＝単収（100 kg/ha）×運賃率（運賃単価/トン/500 km）として算出）を提案し，運賃負荷の高い作物ほど市場近郊に立地するのが有利だし，逆に運賃負荷の低い作物ほど外国産との競争により強くさらされるとした．ここにはフードマイレージ論展開への展望がある。

農産物マーケティングの分野でも，エコロジックのニッチ市場の「補完的」マーケティングの観点から，孤立国の市場論的組替えによる「革新的マーケティング論への挑戦」が提起されている．ベルリン・フンボルト大学のG. シャーデ教授の論文『農村空間におけるマーケティング研究と革新的マーケティング手法としてのチューネン立地論の利用』2001年では，農産物市場の低迷下で流通独占の巨大な近代的マーケティングに対して，それを「補完」するか「対抗」する形で各種の「地域流通」

の多様なチャネルが生じており有機農産物販売，地産地消などニッチ市場とはいえ，近代流通との厳しい競争に対して農民的地域流通がいかに挑戦し，革新性を発揮できるかの最適立地の解を，チューネン立地論に第1図のような形で求めている（註34）。

周知のように，チューネン各圏の構成には集約度序列からの例外生産物がある．I圏の市乳生産，II圏の木材（燃料用，建築用，細工用），VI圏のナタネ油，砂糖カブ，アマ布，デンブ用馬鈴薯，火酒蒸留のほか，肉類，羊毛，皮革，乳脂の生産である．これらは穀物の大量流通とは別に一品質の差別化を図りながらニッチ市場を開拓し，多種多様な革新的事業を展開できるマーケット・ポテンシャルの可能性を示している。

（註1） アダム・スミス（山岡洋一訳）『国富論』上・下巻，日本経済新聞出版社，2007年．ユストゥス・フォン・リービヒ（吉田武彦訳）『化学の農業および生理学への応用』北海道大学出版会，2007年．アルブレヒト・ダニエル・テア（相川哲夫訳）『合理的農業の原理』上・中・下巻，農山漁村文化協会，2008年．Johann Heinrich von Thünen: Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie. Hrsg. und Benutzung unveröffentlichter Manuskripte commentiert von Herman Lehmann in Zusammenarbeit mit Lutz Werner. Akademie Verlag, Berlin 1990. なお『孤立国』には，1826年初版原典のほかに，いわゆる

- 「第3版」まで5種の異本がある—1842年版, 1850年版, 1863年版, 1863年版, 1875年版(邦訳底本)。テアアの『原理』についても、現在、新編集の豪華本刊行の計画があるという(Märkischer MARKT 紙2008年10月1/2日掲載記事)。
- (註2) ①チューネン・アルヒーフの内容を総括的にまとめたものは、Buchsteiner, Ilona / Viereck, Gunther(Hrsg.): Johann Heinrich von Thünen. Schriften-Literatur-Nachlaß. (Rostocker Beiträge zur Deutschen und Europäischen Geschichte. Bd.8, Teil II, Rostock 2000). ②『孤立国』草案の複製版がJ. H. v. Thünen: Beschreibung der Landwirtschaft in dem Dorfe Großen-Flotbeck (1803); translit. und komment. v. R. Schwarze, veröff. In: Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie XIX: Johann Heinrich von Thünen als Wirtschafts theoretiker. Hrsg. v. H. Rietter, 1995. ③Engelhard, Werner Wilhelm: Beiträge zur Thünen-Forschung. Regensburg 2000 (Kölner Schriften zur Sozial- und Wirtschaftspolitik, Bd. 40). ④関連して、後述の《ヘッセン・チューネン・アルヒーフ》創始者による次の文献も重要である。Brauer, Walter: Johann Heinrich von Thünen. Ausgewählte Texte. Wiesbaden 1951.
- (註3) Petersen, Asmus: Johann Heinrich von Thünen, Ein Bild seiner Person in Selbstdarstellung. Aus der Materialsammlung im Thünen-Museum-Tellow. Unveröff. teilw. überarb. u. teilw. unvollst. Manuskript. In: Universität Rostock (Hrsg.): Ehrengedächtnis-Kolloquium anlässlich des 100. Geburtstages von Prof. Dr. agr. habil. Dr. h. c. Asmus Petersen. Rostock 2001, S. 157-168.
- (註4) ①ALBRECHT DANIEL THAER 1752-1828: Thaer Vermächtnis heute. Bibliographie. Die Einfluß Albrecht Thaers auf die nationale agrarwissenschaftliche Literatur in Vergangenheit und Gegenwart. LGF der Humboldt Uni. zu Berlin. ISV Fachdokumentationsstelle, erarb. v. Doris Schulze / Peter Christodulow. Berlin 1998. ②THAER-Zitatensammlung: Ein sinnvoll ausgesprochenes Wort wirkt auf die Ewigkeit, Auswahl und Zusammenstellung der Zitate. Hermine Sell / Uta Weber. Vorwort und reduktionelle, Bearbeitung Günter Darkow. Herausgeber: Fördergesellschaft Albrecht Daniel Thaer. Möglin 1998. その他, 同上テアア振興協会の旧機関誌『テアア振興協会双書』には、新発見の講義録が毎号複製されている。
- (註5) ①Was sagt uns Thaer heute? Kolloquium zu Bedeutung und Aktualisierung Thaers und seine Werkes am 24. 10. 1991 in Möglin. Hrsg. Fördergesellschaft Albrecht Daniel Thaer. Bad Freienwalde o. J. (1992年) ②Landwirtschaft und Umwelt. Zur Bodenfruchtbarkeit—von Thaer bis heute. Kolloquium am 6. 11. 1993 in Möglin. Schriftenreihe der Fördergesellschaft Albrecht Daniel Thaer, Heft 2. Möglin 1994. ③Klemm, Volker: Agrarwissenschaften im “Dritten Reich”. Aufstieg oder Sturz? (1993-1945). Hg. 1994. ④Albrecht Daniel Thaers regionale Ausstrahlung und Bedeutung im Wandel der Zeit. Schriftenreihe der Fördergesellschaft Albrecht Daniel Thaer, Heft 3. Möglin 1995. ⑤M. Frielinghaus u. C. Dalchow (Hrsg.): 200 Jahre Thaer in Möglin. Vorträge auf der Jahrestagung am 30. 10. 2004. THAER HEUTE, Bd. 1. Möglin 2004. ⑥M. Frielinghaus u. C. Dalchow (Hrsg.): Wirken und Wirkungen Thaers. THAER HEUTE, Bd. 2. Möglin 2005. ⑦M. Frielinghaus u. C. Dalchow (Hrsg.):

200 Jahre Agrarwissenschaften in Berlin-Brandenburg. Vorträge auf der Jahrestagung am 14. 10. 2006. THAER HEUTE, Bd. 3. Möglin 2006. ⑧Thünen, Thaer und Koppe. Hrsg. von C. Dalchow. THAER HEUTE, Bd. 4. Möglin 2007. ⑨Die Thaer-Schüler von Wulffen und Sprengel. Hrsg. von C. Dalchow, THAER HEUTE, Bd. 5. Möglin 2008. ⑩Fördergesellschaft Albrecht Daniel Thaer (Hrsg.): Albrecht Daniel Thaer—Ein Leben für die Landwirtschaft, DLG-Verlag, Frankfurt am Main 2006. ⑪Panne, Kathrin (Hrsg.): Albrecht Daniel Thaer—Der Mann gehört der Welt. Begleitpublikation zur gleichnamigen Ausstellung im Bomann-Museum Celle zum 250. Geburtstag von Albrecht Daniel Thaer. Hrsg. im Auftrag des Bomann-Museum Celle. Celle 2002.

ちなみにツエレ・テアア協会も、年報の発刊(1957年～)や、テアア伝記のKörte, W.の複製版など関係図書出版、また《テアア・チューネンメダル》(金章と銀章あり)2000年創設で功労者表彰を行っている。

- (註6) ①Albrecht-Daniel-Thaer-Tagung: Tagungsberichte der Akademie der Landwirtschaftswissenschaften der DDR. Nr. 173, Bd. 5. Berlin 1979. ②Das agrarwissenschaftliche Werk Albrecht Daniel Thaers—Tradition und Aktualität. Wiss. Zeitschrift der Humboldt-Universität. Mathematisch-Naturwissenschaftliche Reihe 27. 1978.
- (註7) ①Symposium aus Anlaß des 250. Geburtstags von Albrecht Daniel Thaer. LGF der Humboldt-Universität zu Berlin, 2003. ②Wecke, Christian / Kretschmar, Gottfried (Hrsg.): Das Vermächtnis Thaers als Begründer der modernen Landwirtschaft. Schriftenreihe des Albrecht-Daniel-Thaer-Institutes für Agrarwissenschaften e. V. an der Universität Leipzig. Bd. 8, 2003.
- (註8) Thünen-Symposium, veranstaltet von der Wilhelm-Pieck-Universität Rostock, der Akademie der Landwirtschaftswissenschaften der DDR und der Historiker-Gesellschaft der DDR von 22. bis 24. Juni 1983 in Rostock anlässlich des 200. Geburtstages von Johann Heinrich von Thünen (1783-1850). Referate. Wissenschaftliche Zeitschrift der Wilhelm-Pieck-Universität Rostock, Jg, 33, Naturwissenschaftliche Reihe H. 1-2, 1984.
- もっとも、チューネン復権を示すこのシンポジウム開催に至るには、その伏線が現れていた。当時の官製大新聞『ノイエス・ドイチュラント』1975年9月20/21日号15面に、H.-H. ミュラーの署名入り記事で、『ドイツの経済学者のひとりの例外—農学者ヨハン・ハインリッヒ・フォン・チューネンについて』の見出しで、「例外」扱いではあれ、体制内で検討が行われてきていることがわかる。
- (註9) ①Schwarze, Reinhard: RICHARD PASSOW. Ein Gelehrter aus Meckenburg. Tellow Thünen-Schriften, Bd. 1, hrsg. Thünen-Museum-Tellow 2001. ②100 JAHRE THÜNEN-ARCHIV an der Rostocker alma mater 1901-2001. ebd., Bd. 2, 2002. ③Schwarze, Reinhard: KLOPSTOCK UND VOGHT IM LEBEN DES LUCAS ANDREAS STAUDINGER. ebd. Bd. 3, 2002. ④DIE THAERTHÜNENSCHEN TRADITION UND DIE ENTWICKLUNG DES LÄNDLICHEN RAUMES, ebd., Bd. 4, 2003/2004. ⑤Das Thünengut Tellow. Von Gutsdorf bis zur Gegenwart. 30 Jahre Thünen-Museum-Tellow. ebd., Bd. 5, 2005. ⑥Universität Rostock (Hrsg.): Ehrengedächtnis-

- Kolloquium anlässlich des 100. Geburtstages von Prof. Dr. agr. habil. Dr. h. c. Asmus Petersen. Rostock 2001.
- (註 10) Seedorf, Wilhelm/Seraphim, Hans-Jürgen (Hrsg.): J. H. v. Thünen zum 150. Geburtstag: Versuch der Würdigung einer Forschungspersönlichkeit. Rostock 1933.
- (註 11) Lehmann, Joachim: Thünen-Rezeption bei Herbert Backe. Der Mißbrauch der Thünenschen Standort- und Intensitätslehre in der Zeit des Faschismus. In: Wiss. Z. Rostock NR; Rostock 33 (1984), S. 126-130 (註 8 参照).
- (註 12) Petersen, Asmus: Die neuere Rostocker Thünen-Forschung, JOHANN HEINRICH VON THÜNEN zum 100. Todestag. Vortrag auf der Gesamtsitzung am 06. 07. 1950, Abhandlungen der dt. Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Kl. für Gesellschafts-Wiss., Akademie-Verl. Berlin. 1952.
- また、このチューネン没後 100 周年記念では、ベルリッツにあるチューネン墓碑への献花式はロストックでは「禁止」となった。
- (註 12) 相川哲夫「アダム・ミュラーの《農業書簡》—反「近代化」の論理をめぐって—」『茨城大学地域総合研究所年報』, 第 11 号, 1978 年.
- 相川哲夫「アダム・ミュラーとアルブレヒト・テアの「近代化」論争, 農業経営構造問題研究会編『農業経営の歴史的課題』第 1 章, 農文協, 1978 年所収.
- (註 13) Koppe, Johann Gottlieb: Über Revision der Ackerbau-System. Berlin, 1818.
- (註 14) 相川哲夫「農業経営学論争の論点開陳者 F. G. シュルツェ」, 『農業経済研究』第 57 巻第 1 号, 1985 年. 相川哲夫「エコノミックとテヒニク—近代農学成立期における—」『農業経営研究』第 22 巻第 2 号, 1984 年.
- (註 15) Liebig, J. V.: Die organische Chemie und Ihre Anwendung auf Agrikultur und Physiologie. 4. Aufl. Braunschweig 1842. S. 133ff (邦訳では省略箇所).
- (註 16) 相川哲夫「農業経営学の体系化—K. ビルンバウムと J. ボールにおける「理論」と「応用」—」『農村研究』第 56 号 1983 年 3 月.
- (註 17) Albrecht Thaer. Sein Leben und seine Bedeutung in Vergangenheit und Gegenwart. Zum Gedächtnis der Wiederkehr des 100. Todestages am 26. Okt. 1928. Hrsg von der Königl. Landwirtschafts-Gesellschaft Hannover. Hannover 1928. Simons, Walter: Albrecht Thaer. Nach amtlichen und privaten Dokumenten aus einer großen Zeit. Gedenkschrift für Geschichte und Literatur der Landwirtschaft zum 100. Todestag Thaers. Berlin 1929.
- (註 18) 相川哲夫『農村空間整備論』農林統計協会, 1985 年, p. 95~99.
- (註 19) Ritter, Kurt: Was ist uns heute Johann Heinrich von Thünen? Einige sozialpolitische Bemerkungen anlässlich seines 150. Geburtstages. In: B. ü. L. NF 19, 1935.
- (註 20) Petersen, Asmus: Die fundamentale Standortslehre JOHANN HEINRICH VON THÜNEN—wie sie bisher als Intensitätslehre mißverstanden wurde und was sie wirklich besagt. Verl.-G.-Fischer, Jena 1936, 19S. Petersen, Asmus: THÜNENS Isolierte Staat—Die Landwirtschaft als Glied der Volkswirtschaft. Parey-Verl. Berlin 1944, 199S.
- (註 21) 東独では Petersen, A.: Albrecht Daniel Thaer. Eine Kritische Würdigung zu seinem 200. Geburtstage. Leipzig, 1952. Sitzungsberichte der DAL, Bd. 14. 西独では Kramer, Mathias: Die Bedeutung von Albrecht Thaer für damalige und heutige Landwirtschaft. In: B. ü. L., NF 30, 1952, S. 132~141.
- (註 22) Klemm, Volker: Eine “Thaer-Renaissance”? Anmerkungen zum Stand und zur zukünftigen Thaer-Forschung. In: Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie, 42. 1994. 1.
- (註 23) Petersen, Asmus: Die neuere Rostocker Thünenforschung, JOHANN HEINRICH VON THÜNEN zum 100. Todestag. Akademie-Verlag, Berlin 1952.
- (註 24) 相川哲夫「東独における農業経営学論争と学的体系化」『農業経済研究』第 51 巻第 3 号, 1979 年.
- (註 25) Backe, Herbert: Kapitalismus und Nahrungsfreiheit. Bad Godesberg, o. J. (1957).
- 本書に対して, 1958 年 H. ハウスホーファは次のように指摘している。「バツケは今でもチューネン圏を政治的現実と解釈している。それは空間秩序を示す数少ない法則の 1 つではあるが, バツケの考え方は 1942 年戦時下の大欧州空間の形成といった政治状況を基礎にしている」(H. Haushofer: Ideengeschichte, S. 317).
- (註 26) 飯沼二郎『農学成立史の研究』農業総合研究刊行会, 1957 年. 熊代幸雄『比較農法論』御茶の水書房. 1969 年. 西山武一『アジアの農法と農業社会』東京大学出版会, 1969 年. 加用信文『日本農法論』御茶の水書房, 1972 年. 相川哲夫「農法論研究序説 I—Ⅲ」『農業経済研究』第 40 巻第 4 号, 第 41 巻第 1 号, 第 43 巻第 3 号. 1969~1972 年. 岩片磯雄『西欧古典農学の研究』養賢堂, 1983 年.
- (註 27) Achilles, Walter: Deutsche Agrargeschichte im Zeitalter der Reform und Industrialisierung, Stuttgart 1993. u. s. w.
- (註 28) Hermand, Jost: Grüne Utopien in Deutschland. Zur Geschichte der ökologischen Bewußtseins. Frankfurt a. M. 1991.
- (註 29) Rostocker Agrar- und Umweltwissenschaftliche Beiträge. H. 4. (Hrsg.) Universität Rosock, Agrarwiss. Fakultät. 1996, S. 115ff.
- (註 30) Tack, Fritz / Köppen, Detloff: Nutzungsmöglichkeiten und Perspektiven des Thünen-Archivs. (註 9 ②) S. 72ff
- (註 31) Schwenke, K. D.: Carl Sprengels Mineralstofflehre, eine Meilenstein in der Geschichte der Agrikulturchemie (註 5 ⑨) S. 23~50).
- (註 32) Pruns, Herbert: Albrecht Daniel Thaer und die ästhetisch gestalteten Kulturlandschaften (註 5 ⑩) S. 183~216).
- (註 33) Stamer, Hans: Die Thünenschen Kreise aus heutiger Sicht—Erkenntnisse für Politik und Wirtschaft. In: B. ü. L., NF 210, Sonderheft, 1995, S. 48~58. Stamer, Hans: Die künftige Landwirtschaft—nach THÜNENS Lehre unter dem Einfluß ökologischer Politik. In: Ebd. S. 56~65.
- (註 34) Schade, Günter: Marketingforschung im ländlichen Raum unter Nutzung THÜNENScher Erkenntnisse zur Standortslehre als innovatives Instrument (註 9 ⑥, S. 129~139).

(2008 年 12 月 9 日受付, 2009 年 6 月 16 日受理)